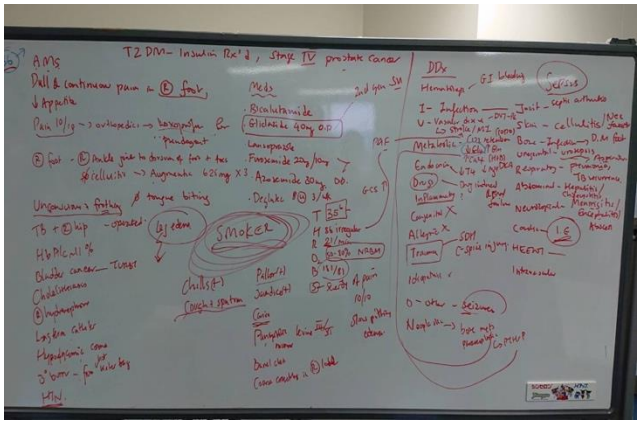
医学科６年　Ｓさん
実習科：救急科

My Experience of HMEP Clinical Clerkship at Shizuoka Medical Center

私は、2021 年 5 月 11 日から 5 月 28 日までの間、静岡医療センターにて Hawaii Medical Education Program をベースにした臨床実習を経験させていただいた。以下、一ヶ月間の実習内容、静岡医療センター周辺の環境、実習外の過ごし方などを記載する。

1. 一ヶ月間の実習スケジュール

<救急科>毎朝９時から１時間ほどカンファレンスがあり、学生一人が ER で見学した患者さんのプレゼンテーションを行った。他の学生と研修医は、主訴や症状から鑑別診断をあげ、必要な問診事項・身体診察・検査を考えていく、という、ER での思考プロセスを練習した。その後は、先生の hotline が鳴るまで医局で待機（自己学習）となる。ER に呼ばれると、学生は救急車到着から患者の退院・入院・転院までの一時始終を見学・体験した。まず、救急車到着までに輸液、心電図、エコーの準備を行い、与えられている情報から鑑別診断をあげる。患者さんが搬入されたら ABC を確認し、モニター、酸素、ラインをとる。その後、上級医の指示に従いながら心電図やエコーを行い、必要な検査をして最終的な鑑別診断を考える。上級医がいる時は、侵襲性の高いライン、動脈血液ガス、尿道バルーン留置などをさせていただいた。そうでない場合は侵襲の高い手技は見学になるが、患者さんの問診、身体診察などは積極的にさせていただけた。ER に呼ばれるのは１日１、２回程度だった（発熱、咳嗽など新型コロナウイルス感染が疑われる人は見学することができなかったため少なかった）。週に一度程度、不定期に海外にいる講師や他院からいらっしゃる外国人講師による international conference（全て英語で実施）が開催された。International conference は静岡の上級医が症例プレゼンテーションを行い、オーディエンスは追加の質問や鑑別診断を発言していくものだった。学生も積極的に発言することが求められた。



Dr. Joel Branch の international conference

<内科>救急科を回っている学生も、朝８時からの内科カンファレンスと回診、夕回診（16:30~17 時）は参加必須だった。それに加えて、私は ER で見学できる症例が少なかったこと、内科の手技も勉強したかったことから先生方にお願いして、内科を回っている学生と同様に入院中の患者さんも割り当てていただいた。朝８時のカンファで患者さんのプレゼンができるように、朝６時半に医局へ行き、前日の（特に夜間の）様子をカルテで確認しつつ朝の問診で聞きたいことをまとめ、７時に患者さんに挨拶、身体診察や問診をし、カルテに SOAP を記載した。日中は患者さんの様子を見に行ったり、3 年目の先生と一緒に患者さんの今後の治療について議論しあった。

（1 日のスケジュール例）

5:30　起床
6:30　医局でカルテチェック
7:00-8:00 受け持ち患者さんのチェック、カルテ記載
8:00-9:00 内科カンファレンス、回診
9:00-10:00 救急カンファレンス
12:45　放射線レクチャー
14:00-16:30 ER で対応
16:30　回診
17:00 Dr. Joel Branch International Conference
18:30　終了

2. 静岡医療センター周辺の環境について

病院横の教育研修棟の一部屋で一ヶ月間過ごした。室内は写真の通りだった。勉強机、ベッド、寝具一式、冷蔵庫、湯沸ポット、湯船、シャワー、トイレ、ハンガーラックが用意してあった。共同部屋が 2 階にあり、替えのシーツ、掃除用品、電子レンジが置いてあり、いつでも使用可能であった。研修棟には Wi-Fi も設置されていたため室内で勉強することもできた。限られたスペースではあったが、比較的過ごしやすかったと思う。

病院横のコンビニエンスストアで日々の食材を購入することが多かった。歩いて 10 分ほどの所にスーパーがあったが、日中は実習が忙しく、夜は真っ暗で道が少々不気味だったため私は一度も利用しなかった。徒歩 10~15 分圏内にレストランが数件あったので、外食する時もあった。

室内の様子

教育研修棟

3. 土日の過ごし方

一ヶ月の実習でできるだけ多くのことを吸収しようと思い、毎週土曜日は 10 時間ほど当直に入らせていただいた。当直では上級医の先生はいらっしゃらないことが多かったので、研修医について ER の見学をさせていただいた。週末や夜間では、週中の日中にくる患者さんとは層や疾患が異なっていることがあったため、多くの症例を学ぶことができた。日曜日は他の学生と共に病院周辺を散策したり、部屋で国家試験の勉強などをした。

4. 学んだこと

静岡の実習を通して、challenge の二つの意味を学んだ。一つ目の challenge は挑戦である。新しい場所へ行き、やったことのないこと、自信のないこと、学んだことがないことに触れることはとても勇気がいるが、一歩踏み出して挑戦することで、たくさんの気づきと発見があることがわかった。

二つ目の challenge は異議を唱える、という意味である（テニスのサービス時に選手が叫ぶ challenge!の意味)。内科患者さんを割り当てていただいた際、初めは先生に言われた通りに患者さんの身体診察やカルテ記入を行っていた。しかし、ある時内科部長の先生に、「あなたはどう思うのか、どうして行きたいのか。アメリカの学生ならもっと上級医のやり方に対して意見を出すし、自分で治療計画を立てる」と指摘され、自分がしていることが患者さんを診る、ではなく、見るであることに気づいた。そこで改めてカルテを遡り、紹介されてきた時の患者さんの状態、かかりつけ医で処方されている内服薬、併存している疾患の治療法など、全てに「なぜ？」と問いかけてみると、自然と疾患ガイドラインへと手が伸び、論文を読み漁るようになり、先生にもどんどんと疑問をぶつけるようになった。自分で調べれば調べるほど、先生の治療方針にも疑問を持つようになり、もっとこうした方がいいのではないか、というアイディアも浮かんできた。先生と学生という立場だから。。。と初めは思っていたが、一度先生に投げかけてみると一緒に考えてくださり、先生が気づいていなか

ったことを指摘して実際に治療方針を変えることができた時はとても嬉しかった。一方で、ガイドラインがどんな場合も当てはまるわけではないことも学ぶことができた。Challenge することで、こんなにも多くのことを学ぶことができるとは思ってもいなかった。私は今後も、この二つの challenge 精神を忘れずに医療に携わっていきたい。

最後に、このような貴重な経験をさせてくださった HMEP と静岡医療センターの関係者のみなさま、及びコロナ禍にもかかわらず学生を県外で実習できるようにご尽力くださった高知大学の皆様に感謝申し上げます。